

第四十五回「全日本中学生水の作文コンクール」青森県審査入賞作品集

目次

青森県優秀賞5編

日本の水	……	八戸市立是川中学校	二年	小林千花	……	1
水に惹かれる心	……	むつ市立関根中学校	三年	鳴海綺音	……	2
水の未来を考える	……	南部町立名川中学校	二年	松山結宇	……	3
百年先も使い続けたい	……	八戸市立三条中学校	二年	近藤千花	……	4
水の惑星、水の国に生きる	……	八戸市立三条中学校	二年	米沢陽花	……	5

青森県入選10編

水は命	……	私立青森明の星中学校	三年	田中杏奈	……	6
たった一人の心がけで	……	八戸市立是川中学校	三年	林崎珠希	……	7
未来のため	……	八戸市立是川中学校	三年	小笠原千紘	……	8
水から見えた未来	……	八戸市立三条中学校	二年	川村朝妃	……	9
水への感謝	……	むつ市立関根中学校	三年	氣仙奏二郎	……	10
人間と水の関係	……	むつ市立関根中学校	三年	小笠原磨祐	……	11
わたしたちのあたりまえは	……	むつ市立関根中学校	二年	中野沙月	……	12
水への理解	……	むつ市立関根中学校	二年	山本芽依	……	13
私たちに関わる水	……	むつ市立関根中学校	一年	坪笑鈴	……	14
僕の思う水	……	南部町立名川中学校	二年	赤石聖那	……	15

【日本の水】

青森県 八戸市立是川中学校 二年 小林 千花

亡くなった私の祖父は「水をつくる人」だった。四十年以上もの間、市の浄水場やポンプ場で市民のための水を作り続け、みんなに届け続ける仕事をしてきたそうだ。

私の知っている祖父はすでに退職し、優しく明るい、たくさん遊んでくれたおじいちゃんだった。そして私が四歳の時に亡くなったので、祖父の仕事についてはあまり詳しくはなかった。

母から私の知らなかった祖父の働いていた頃の話聞いた。

水道の水は、二十四時間、すべての人に届けることが必要だ。そのため、祖父の勤務は日中働いた次の日は夜勤、夜勤から帰宅した次の日が休みという四日間のサイクルを繰り返していたそうだ。土日が休みではない日も多く、母は家族旅行などもほとんど連れて行ってもらったことがなかったそうだ。

水の作り方は、その日の川や湧き水のコンディションを確認するところから始めるそうだ。にがり方や雑菌の量、PHなどを調べ、それに合わせ、薬品を加える。不純物を凝集剤で取り、ろ過し、塩素を加えて殺菌し、水道水を作る。

大雨や台風などのときは急激に水が濁るため、真夜中でも職場に駆けつけ、水作りを手伝わなければならないときもあったそうだ。

それから、季節や時間、使用量を調べながら、送水量を考えてそれぞれの地域に水道水を送っていたのだそうだ。

祖父は、「八戸の水は自分たちが守るんだ」と誇りをもって仕事をしてきたそうだ。

八戸の水は「軟水」で、味がまろやかでおいしく、髪や肌がうるつるになる良い質の水でもあるそうだ。

塩素の匂いがする水が嫌いな人も多いが、匂いのない水は送水の末端の、殺菌力の低下した危険度が高い水だということも初めて知った。

水道の蛇口をひねると出てくる水は、かつて祖父が誇りを持って作り、今も誰かが私たちに届けようと、心を込めて作り、送ってきているものなのだと思う。

私にとって、水道水は少しだけ特別なものを感じられるようになった。私たちは日常で沢山の安全な水を使用している。だが、世界には安全な水を飲めず、そもそも水を飲めないという人もたくさんいるのだ。二〇二〇年には安全な水を飲めない人が世界中に二十億人もいる。これは日本の人口の十六倍にもあたる。

日常で使用している水は、当たり前前に安全だと信じているが、その安全は日本に豊富で良質な水があり、誰かが守って作ってくれたものなのだと知った。

水道から出る水がどこから来たのか、どうやって来たかを知ると、大変な手間がかかり、私たちに届いていることが分かる。そんな水を、これから大切に使っていきたい。未来の誰かが使えるものへと繋げていきたいと思う。

【水に惹かれる心】

青森県 むつ市立関根中学校 三年 鳴海 綺音

水のイメージは？と問われたなら、とても自由なものだと私は答えません。水は固体にも気体にも形を変えられます。雲にもなれます。そして、空へすら行くことができる元来、自由な存在です。

器や環境、名前すらも変化させて水は世界を巡っています。そんな水の自由さに心惹かれた先人はこれまでもたくさんいたのではないのでしょうか。私はそう思います。

例をあげます。皆さんは「流水文」をご存じでしょうか。川や池の水を意匠化し、平行線の端を \cap の字でつないだ文様です。この流水文は弥生時代の銅鐸にもみられている文様です。つまり水は弥生時代にはもうすでに人間にインスピレーションを与えていたということなのです。

しかし、自由に変化し、様々な姿形を見せる水が人間に与えたインスピレーションを形にしたのはこれだけではありませんでした。渦を巻く水を描いた観世水文、寄せては返す波の姿を瞬間的にとらえ、意匠化した波文様。他にも水はその流れの速さや、水量などで見ることのできる表情や受ける印象が全く異なるので、荒磯波、さざ波など、水に関連する文様は数多く存在します。これらのことから水が日本の文化に深く関わっているということがよくわかります。

水の見せる表情を描いているのは文様だけに限りません。文学作品の中にも重要な役目を果たし、それが描かれています。その典型として登場人物の心理を表す情景描写や背景など様々な場面で活躍しています。

とりわけ有名なものとしては、江戸時代に俳諧師として活躍した松尾芭蕉の代表句「古池や蛙飛び込む水の音」があげられます。この俳句で水と関連している語句は「古池」と「水の音」です。「古池」という一つのワードだけで閑散としてひなびた池を連想することができます。それに「水の音」が加わることで、蛙が飛び込んだ音の余韻を感じます。このように、水の表現の仕方一つで連想させるものが大きく異なってくるのです。

ひとえに水と言っても荒々しい波の水と風いだ湖の水では受ける印象が全く違います。前者は怒りや激しい感情を、後者は静かで穏やかな印象をだれもが受けるに違いありません。

日本は水に囲まれた島国ゆえに豊かな水とは切っても切れない関係がどうやら昔からあったようです。もともと日本では水を神聖なものとして扱ってきました。そして、その風習は現代の日本各地に今も根付いています。滝に打たれたり冷水を浴びることで身体のがれを除去し、清浄にする滝行、神社を参拝する際に行う手水など神聖な場所の多くで水は重要な役目を果たしています。また、産湯や末期の水、若水など水は日本人の生命観にも大きく関わっているのは明らかです。

水はけがれない、自由であるべき存在だと今も私は思います。その自由な姿がかつて文様として描かれ、人の感情を現し、日本人の考え方に多大な影響を及ぼしました。

しかし、その水が今危機に陥っています。産業排水や生活排水によって汚染され、本来の美しさや自由さが失われつつあります。日本人が愛し、心惹かれてきた水の美しさを、自由さを現世で失ってもいいのでしょうか。日本の文化を発展させた水の本来の姿をここで途絶えさせてもいいのでしょうか。

今こそ私達一人一人が水を守るために取り組むべきことがたくさんあるはずです。自由な水を守りたい。先人達が水に惹かれた心を保ちたい。魅力を失った水には価値のあるインスピレーションはみじんも生まれなはずです。

【水の未来を考える】

青森県 南部町立名川中学校 二年 松山 結宇

私の住む南部町には、一級河川の馬淵川が流れている。広い川幅。その時々で変わる水量。日によって違う表情が見える。近くを通ると今日ほどな感じかな、とついつい見えてしまう。

小学四年生のとき、夏休みの自由研究のために、家族で岩手県にある馬淵川の源流を見に行った。源流は、ちよろちよろと流れる湧き水のようなもので、源流といつも見えている馬淵川とは、まるで違うもののように思えた。いくつもの支流が合流し、雨水とともに水の量が増えていく。川は海に流れ込み、やがて蒸発し、雲になり、雨としてまた川に戻ってくるようになるのだろう。水の循環は壮大で、それを想像すると何だか不思議な気持ちになる。

馬淵川は周辺の広い地域の水源として生活の支えになっている。そのおかげで、水の不足を感じることはない。しかし、世界では、水道水をそのまま飲める国は日本を含め、世界にある百九十か国以上の国のうち九から十三か国ほどしかなく、世界の水不足や衛生問題は深刻だ。SDGsでは、「安全な水とトイレを世界中に」という目標が掲げられ、全ての人が衛生的な飲み水やトイレ環境のもとで生活できるようになることを目指して取組がされている。私の当たり前前の生活は世界の当たり前ではないのだ。

このような中、私の住む南部町内で世界の水問題に向けて様々な取組をしている人たちがいる。青森県立名久井農業高等学校の研究チームだ。名久井農業高等学校の研究チームは、水のノーベル賞のジュニア版ともいわれる「ストックホルム青少年水大賞二〇二〇」でグランプリを受賞している。日本古来の土壌固化技術「三和土」を用いて、西アフリカの乾燥地での集水方法である「ザイ」の水を受け止めるための壁を強化し、土壌流出を防ぐ技術の開発などについて発表したそうだ。「三和土」で作った「ザイ」は、十二週間放置しても崩れないという。この水を収集するシス

テムは、乾燥によって作物の育てにくさに苦しんでいる地域の食料生産量の改善につながる提案だ。さらに、簡易堤防の開発も行っているそうで、新たなものへの発展しながら研究が先輩から後輩へと引き継がれている。実際、グランプリ受賞後も「二〇二二日本ストックホルム青少年水大賞」で「土壌水分と転炉スラグで塩類集積を抑制するシステムの開発」をテーマに研究したものが大賞を受賞している。地元にある身近な高校から、世界につながる発信が継続してなされていることを誇らしく思う。自分ではない誰かのためを思って行動を起こし、粘り強く取り組むことは、とても素晴らしいと思う。これは、SDGsの根本とも共通しているのではないだろうか。世界のどこかで起きている水問題をみんな考えていくことはきっと大きな力になる。

私も、水問題で困っている世界の人々の笑顔が見たい。そのために私に必要なのは、視野を広げ、想像力をふくらませることだと思う。蛇口を捻れば当然のように「おいしい」と思える水が飲める一方で、簡単に衛生的な水が手に入らない状況に置かれている人のことを想像してみる。私にできることは何だろうか。水を大切に使うことだろうか。それとも必要以上に水を汚さないことだろうか。馬淵川の水が汚染され、生活用水として使えないような未来には絶対にしたくない。自分の行動が世界や未来の水問題につながることを忘れないで生活していこうと思う。

国境を越えて優しさでつながり合い、水問題を協力して解決できる未来を、私たちの手で創っていききたい。

【百年先も使い続けたい】

青森県

八戸市立三条中学校

二年

近藤

千花

兄が大学進学のために金沢市に住むことになった。住み始めてから二週間くらいたった頃、兄から近況についての連絡がきた。金沢市が私の住む八戸市よりも暑いことや、雨の日が多いことを教えてもらった。その中に、

「水は、一度沸かしてから飲んだり、お店で買ったたりする人が多いらしい。」という話があった。驚いた。同じ日本で水を買って飲むなんて。同じ日本でも、住むところによって全く違うのだなあ、と感じた。

その後、夏休みになって、家族で金沢市に行った。金沢市の駅は、とても近代的で、魅力的な建物だった。兄によると、国立競技場を設計した人によるものだという。そして、そこには、噴水で「金沢」や時刻を表すアート作品もあった。また、金沢市の道路を車で走ると、道路の縁がさびついているような茶色に染まっていた。見たことのない光景を不思議に思い、家族に尋ねた。

「水を使って雪を溶かしているから、道路に色がついてしまっているのだと思う。」

言われてみると、道路の真ん中に、小さな穴が並んでいた。冬になると、その穴から水が出て雪を溶かすのだという。八戸市では考えられないことだ。水で雪を溶かそうとしたら、そのまま凍ってしまうだろう。金沢市は、冬でも凍らないくらい気温だからできるのかもしれない。金沢市の気候に合わせた水の使い方に感心した。金沢市は、北アルプスからの雪解け水や日本海からの降水など、水に恵まれている土地だと思う。そうした環境だからこそ、水を生活の様々な場面で活用できるのだと思う。飲むことや洗うこと以外の水の使い方の多様さに驚き、興味をもった。

兄が住むアパートに着いて、家族みんなで部屋の掃除をした。

「カルキの跡が八戸市よりもついているね。」

母が言った。見ると、蛇口や浴槽などに、白い粉が固まっていた。兄が言

っていた、水を買って飲む人が多い理由が分かったような気がした。おそらく周りの山々から流れる養分や成分が八戸市と異なるのだろう。軟水や硬水という水の性質の違いを耳にしたことがある。改めて同じ日本でも、その土地土地によって水の性質が大きく異なることを実感した。

私が住む青森県八戸市。青森県は銭湯が日本で一番多い県として有名である。幼い頃私の住んでいる周りにも、天然温泉が数カ所あった。週末、家族で温泉に入るのが習慣にもなっていた。そのため、水に恵まれていると昔から思っていた。しかし近年、相次いで温泉が消えている。よく通っていた温泉も突然閉店を迎えることになった。聞くところによると、新たに掘り探しても見つかる見通しが立たないことが理由だそうだ。恵まれているはずの環境が足元から崩れていく感じがした。

水は決して無限なのではなく、限りある資源なのだ。だから守らなくてはならないのだ。守り、維持していくからこそ、私たちは有効に、様々な活用できるのだ。そして、活用しなければ、私たち人間、また、生き物も生きていくことができないのだ。

では、今の私に何ができるのだろうか。水質を改善したり、海のごみをなくしたりすることはできない。今の私にできることは、せいぜい、水を大切に使うことだけだと思う。例えば、歯磨き中に水を出しっ放しにしない、シャワーの時間を短縮する、食器の洗い方を工夫する。どれも小さいことばかりだ。しかし小さいことを続けたり、自分の気付きを周りと共にしたりすることで大きな波となるかもしれない。そして、それを実際に目で見たり、感じたりするのは、しばらく先のことだろう。微力ではあるが、水のありがたさから気が付いた今の行動を豊かな未来へとつなげていきたいと考えている。

未来の私のために、未来の世界のために。

私は行動し続ける。

【水の惑星、水の国に生きる】

青森県 八戸市立三条中学校 二年 米沢 陽花

私たちは日々たくさんの漢字を目にしている。漢字は、「部首」と「つくり」に分けられて構成されている。ところで、常用漢字で一番使われている「部首」をご存知だろうか。実は、「さんずい」が一番使われている漢字が多いのだ。このことから、日本は古くから水と関わりが強い地域であることが、読みとれる。

では、私が住む三条のまちはどのように水と関わっているのだろうか。私がかつたきに頭に浮かんだのは「浅水川」。小さい頃に友と水が少なくなっている浅水川を見て、

「浅水川じゃなくて、浅水「から」だね。」

なんて言って笑い合っただことは今でも鮮明に覚えている。しかし、今は穏やかな浅水川だが、一九六一年と、一九九〇年には氾濫が起こり、大規模な洪水となった。昨年度行われた防災訓練では、プールに膝下くらいの水をはり、逆流に向かって歩く体験があった。最初は、そこまで高い水位ではないことから油断していたが、プールの中に足を入れた瞬間から私の甘い気持ちは一変した。ロープをつかんでいないと立てなかったのだ。いくら訓練といえど、恐怖をおぼえた。しかし、自然災害を理解する貴重な体験だった。

次に頭に浮かんだのは「米づくり」。米づくりは小学校の総合学習の一環で体験したことがある。初めての作業に胸を高鳴らせながら挑んだが、思っていた以上の重労働で大変だった。そんな時、一緒に作業していたおばあさんが、

「三条のお米はおいしいよ。なぜならね、ここの地域の水はとっても綺麗だから。あとは、みんなが一生懸命作るからかな。」

と教えてくれた。「大変だ」「疲れた」とばかり思っていた私の気持ちは、

「頑張つてよかった」という気持ちに変わった。

改めて思い返すと、三条の地域は水と密接に関わっていることがよく

分かった。このことは三条に限った話ではないと思う。日本は地震や台風が多い。だから、津波、大雨、洪水が起こる。日本の主食は米。米を育てるためには水が必要。また、野菜や飼畜にも育てるためには水が必要だ。だから私たちは、水に生かされているといつても過言ではないと思う。

そんな水も無限に出てくるものでも、当たり前に出てくるものでもない。地球には莫大な量の水があるが実際に使える量はそのうちの約0・0一パーセント。たったのこれしか使えないのだ。また、日本のように綺麗で安心して使える水が出る国も両手で数えることのできる程度。さらには、水が出ないことから、子どもが、果てしなく遠い井戸へ水をくみに行くこともそう珍しい話ではない。そうなると、子どもは学校に行くことができなくなる。「水が出ない」私からすればそれだけのことで、たくさんの人たちの未来が奪われている。それが現実だ。

悲しい現実を見て「自分に何かできることはないか」と考えたが、正直のところ直接的にできることは何も思いつかなかった。しかし、今、私にできることがあるとするならばそれはただ一つ。日々の「当たり前」に感謝することだ。毎日の衣食住への感謝。学校へ行けることへの感謝。そして、未来があることへの感謝。全ての物事に感謝する。それが「水の惑星、水の国」を生きる私たちの使命なのだ。

【水は命】

青森県 青森明の星中学校

三年

田中 杏奈

私たちが毎日使っている水はどこからきているのだろうか。

そんな疑問を抱き、調べてみることにしました。すると、私たちの命を支えている水は自然からつくり出されていることが分かりました。水の主な源は川の水であり、その原点は空から降った雨や雪です。海や陸の水が蒸発し、上昇気流で運ばれ、上空で冷やされて雨が降ります。そして地上に降った雨は川となったり地下水となったりして、いずれ海へ戻ってきます。それから海の水は再び大気中に蒸発し、雲をつくり雨を降らせます。その繰り返しなのです。

私が一番伝えたいことは、地下水を通って海へ戻って私たちのもとへ運ばれているということです。近年、日本では地球温暖化を防ぐために風力発電や太陽光発電などの再生可能エネルギーの普及が進んでいます。青森県の西海岸にも洋上風力発電の建設計画が進んでいるそうです。風力発電は環境にやさしく安全でクリーンなエネルギーかもしれませんが。しかし、この風力発電は山間部や海岸沿いに建設されていることが多いです。そのため、山間部に建設する場合はたくさんの方を伐採して建設しています。このように調べてきて水と森は深く関係しているのだと改めて思いました。また、数十トンのプロペラを建てることで地下水脈を押し潰してしまいます。地下水脈は海にまでつながっているのです。地下水脈が狭くなってしまふと私たちの生活にも影響があるのではないのでしょうか。私たち人間の生活だけではありません。さまざまな生き物や植物などの自然も川の水によって育まれているのです。

日本は国土の六十七パーセント、三分の二が森林です。青森県も岩木山、白神山地、下北半島など森林が豊富に存在しています。森は二酸化炭素を酸素に変えたり、地下で雨水をきれいにしたりしています。それだけではありません。土にたくさん水を含むことができ川の水量を維持するという大事な役割もしているのです。まさに、緑のダムといえるでしょ

う。私は、青森県だけではなく日本、そして世界の美しい緑の自然を守りたいです。そしてみんなが水に困らないで笑顔で安心した生活を送れるようになってほしいです。そのためには、森林を伐採せずにこの限りある自然を効率よく使っていくことが大切だと思います。

風力発電を建設することで二酸化炭素を排出せずに電力供給ができると思います。しかし、それは自然との共生につながるでしょうか。自然環境を保全するとともに、環境負荷の少ない社会づくりを目指してほしいと強く願います。私たちが生きていくためになくてはならない水。今、世界の人口は増え続けていて、水不足の心配もされています。今回、この作文を書いたことをきっかけにもう一度水の大切さについて改めて考えてみたいと思います。水は命。今日もありがとうございます。

【たった一人の心がけで】

青森県

八戸市立是川中学校

三年

林崎

珠希

水の作文の一回目を書いてから、一年が経とうとしている。その一年間、私はどのように工夫をして生活していただろうか。

まず思いつくのは、水道のことだ。中学生であり、手伝いをするのも多くなる。水道を使う家事といえば、皿洗い、米研ぎ、料理など数々だ。その中でも、特に皿洗いは意識していた。水を出しっぱなしにせず、大きめの皿に水をためる。その中で一度潤し、スポンジに泡をつけて洗っていた。米研ぎでも、必要な分だけ水を出して洗っている。このように一人一人が意識することで、たくさんの方が節約されることを知り、水を飲めない人々を救うことができる。昨年書いた一日に八百人の子どもが亡くなっているという内容を思い出す。その中の一人でも、たった一人の命でも救えているだろうか。一つ一つの命が大切であり、一つでも多く救いたい。世界には、水をくみに行くのにとっても長い距離を歩かなければならぬ人も多くいる。私達は水道までなん歩か歩けば、すぐに水が飲める。有り難いことだ。私がこうして作文を書いている時、水をくみに疲れながらも歩いている子どもがいるのだろうかと思うと、ジュースが飲みたい、なんて何をわがままを言っているのだろうかと思えてくる。

何も考えていなかったある日。コップに水を入れ氷を入れ、一口飲む。それに満足してそのまま時間をおく。また水が飲みたくなりコップの元へやってくる。水がとけているコップの周りに水滴がついている。ぬるい水が嫌で、今すぐ冷たくて爽やかな水が飲みたくて。私はその水を捨ててしまう、すぐに新しい氷を入れ、冷たい水を飲み、満足する。また時間をおく、という行動が繰り返されていた。今そんなことを思い返してみると、とてもひどいことをした、と反省する。泥水のような茶色くにごった水を飲んで生き延びている人々がいるというのに、水を捨てることのできる人間を見たら、その人々はどんなに憎たらしく思うのだろうか。日本には多くの水がある。とは言っても、地球には飲むことのできる水がとて

もなく少ない。その中でも日本は多い方なのだ。それは有り難いことだ。毎日私達は水分を取り入れていることに、日々感謝しなくてはならない。「水が飲めない。」こんな理由だけで亡くなってしまう人がいるというのは、あまりにも悲しいことだ。あと一口、もう一口だけでも飲むことができたなら、生き延びることができたのかもしれない。そんなことがないように、私は意識するのだ。一人が意識するだけで、たくさんの方が節約されることと聞いたことがある。私が意識することで、少しでも水が節約されれば良いなと願う。まずは、自分ができることから行動して生活していこうと思う。

今年もこの作文のテーマをきっかけに、昨年よりもできることを増やしたい。意識を高め、一滴でも多く水を節約したい。世界中の水の存在との距離が遠い人々へ、一センチでも距離を縮めることができればと願う。そんな世界のことを考える。

これからも、水に感謝しながら日々を過ごそう。そして今日も節約しながら皿を洗い、米を研ぐ。

【未来のために】

青森県 八戸市立是川中学校 三年 小笠原 千紘

水。それは私たち生き物にとつてなくてはならないものだ。しかし、その水によって苦しんでいる生き物がある。それならその生き物たちを苦しめている原因はなんなのだろうか。それは、私たち人間なのだ。

小学生の頃、私が家族と海に行ったときのことだ。私は、砂浜で貝拾いをしたり、砂のお城をつくったりしていた。すると、砂浜におちていたあのものが目にはいった。何も知らずにそれに近づき、触ってみると、ふわふわしていた。円柱の形をしていて、長さは三センチほど。色は灰色で薄汚れていた。何も知らなかった私は、家族のもとへ持っていき、

「これ、なに？」

と尋ねた。すると、家族は、

「それ、たばこの吸い殻だよ！さわらないで！」

と言った。私はショックだった。このきれいな砂浜に平然とごみが落ちている。周りを見渡すと、たばこの吸い殻はたくさん落ちていた。そして、落ちていたごみはたばこの吸い殻だけではなかった。周りにはたくさんのごみが落ちていた。

数年がたち、私は小学四年生になった。数年たった今でも、あの時の光景は今でも鮮明に覚えている。この時から私は八戸市水産科学館マリエントが主催する「ちきゅう」たんけんクラブ」というものに参加していた。このクラブでは地球の現状を知り、それについて研究し、まとめるというのが主な内容だ。さけをふ化させたり、本物のダイオウイカを見たり、様々な貴重な体験をすることができた。その中でも特に印象に残っているのが、「海ごみ」について調べたものだった。この回では、実際に種差海岸に行き、どんなごみが多かったか、そしてそのごみは海や地球にどんな影響を与えるのか考えた。実際に調査する前に、同じグループの人たちとごみが多いか予想を立てた。しかし、実際に種差海岸に調査に行ってみると、実際の漂流物と予想した予想は大きく異なっていた。最も多

かったのは食品の容器である。八戸は漁港が多く、発泡スチロールをたくさん使うためであろう。その他にも外国のごみが、日本へ、日本のごみが外国へという越境的な問題もあるという。また、マイクログラスチックの存在も知った。マイクログラスチックは回収するのが非常に難しく、マイクログラスチックになる前に回収が必要である。

あの時、私が見た光景は忘れることができないだろう。あの海を汚し、生き物を苦しめていたのは私たち人間だったのだと、今ならわかる。それならば私たちにできることは何だろう。買い物のときにエコバックを持参したり、ごみ拾いに参加したりなど私たちにできることはたくさんあるのだ。

その少しの勇気で、少しの努力で未来は変わるかもしれない。私は少し勇気を出して努力してみようと思う。この地球に住む生き物のために、そして未来のために。

【水から見えた未来】

青森県 八戸市立三条中学校 二年 川村 朝妃

「また出っっぱなしだぞ」

という声が聞こえ、水道の蛇口を下げようと手が伸びてくる。歯をみがく私の横には父が立っていた。

父はやたらと「水」に厳しい。私はなぜ父がそんなにも節水を徹底しているのか疑問でしかたがなかった。地球は「水の惑星」とよばれるほど水がたくさんある。それほど節水をするのは大切なのだろうか。そんなことを思いながら、父に注意された私はむっとししかめっ面をすると、父は笑い、その場を立ち去った。

そんなのんきな私の考えを変えたのは、あるインターネットに掲載されていた二つの衝撃的な記事であった。

一つ目は、次のような内容であった。

「日本は今後、水がなくなるかもしれない」

私はこの文を読んだとき、驚きすぎて意味をよく理解できなかった。私は驚きと「本当なのだろうか」という信じられない気持ちのまま、記事を読み進めた。

記事の内容はこのようなものであった。

日本の水資源の多くは雪解け水や雨水によるものだ。それらが約一五年から二〇年かけて地面にしみこむことにより、「地下水」として蓄えられている。しかし、地球規模で問題とされている地球温暖化が進み、降水量が少なくなる気候変動がおこると、日本の水資源に影響することになる。例えば今、気候変動により降水量が少なくなったとしても、数年前に降った雨水が地下に蓄えられているため、すぐに影響は出ない。しかし、数年後にはその分の影響がおよび、水不足になる可能性がある。「気がついたときにはもう遅い」のである。

私は言葉が出なかった。水がなくなってしまうたら私たちは生きることができない。現実を想像し、私は恐怖を覚えた。気がつかないうちに危

機が迫ってきている。私たちの命を守るために何かできることはないのだろうか。

二つ目は、もうすでに命を奪われつつある生き物についてだ。

クロマグロ、ラッコ、ジュゴン、トド、ニホンウナギ。これらの海の生き物たちは水族館で私たちに癒やしを与えてくれたり、食したりする生き物だ。一度は耳にしたことがある身近な生き物ではないか。だが、これらの生き物は「絶滅危惧種」に指定されている。その理由として挙げられていることは、「生息地の汚染」ということだ。私たちの生活用水や工業用水により生き物たちが暮らす川、そして海に汚染が広がり、住む場所や食べ物が奪われ、命を落としてしまっている。私たちの軽率な行動により尊い命がたくさん奪われているのだ。

世界にはなんと約三七四〇〇匹の動物や魚などの絶滅危惧種がいる。生き物の約三割が絶滅の危機にさらされているということも分かった。そんな生き物たちのことを思うととても悲しいし、申し訳ない気持ちになる。

人間の体の約七〇パーセントは水分でできている。そんな人間から水が奪われると、私たちは生きることができない。動物や魚も同様である。しかし私たち人間は、知らないうちに動物や魚の生命の源である水を奪っている。そして私たちが気づかないうちに気候変動による「水不足」の危機が迫っているのだ。

人間、動物、水。これらは一つの輪のようにつながっている。どれもなくてはならない存在だ。その命を守るために私ができることは些細なことかもしれない。けれど、父の言葉が私に影響したように、私の行動が誰かを影響させることだってできるはずだ。

そう願ひ、私は水道の蛇口をそっと下ろした。

【水への感謝】

青森県 むつ市立関根中学校 三年 氣仙 奏二郎

僕たちはあたり前に水を使うことができる。蛇口をひねればそれは出てくるし、何分出し続けても水がでなくなることはない。なのに僕たちはそれほど感謝して水を使ったりはしていないのではないだろうか。

水道がなかった時代は、井戸の水をくんだり雨水やわき水をためて使っていたりしたそうだ。現代では蛇口からあたり前に出てくる水だが、水源にはダムがあり、そこに多くの水をためている。比較的貯水量が豊富にあるときはふつうに川に流し、反対にそれが不足気味るときは節約しながら流すという具合に調整を図っている。一般的に川の水は汚れていたりと、ゴミが混じっていたりするのでそのまま飲むには適さない。そこで飲むるようにしているのが浄水場である。はじめに川からの水をしばらく放置して大きなゴミや砂を取り除き、次に小さな汚れを薬品を使って大きなかたまりにして取り除く。その後石や砂の層でこしてさらにきれいにする。ここまでの水のたいいていのは消えてきれいになる。しかし、まだ味が悪くなる原因のカビやにおいのもととは完全に除去していない場合もある。そこで高度浄水処理という方法が行われる。

高度浄水処理とはオゾンを使ってにおいのもとを分解し、分解されたにおいのもとを活性炭で吸収する方法である。こうして処理をされた水をさらに塩素で消毒してようやく安心、安全な水が出来上がるというのが一般的な工程らしい。その水をポンプで配水地に送り、そこから僕たちの家へ水道管を通して届けている。

僕は小学四年生のころに浄水場へ見学に行ったことがある。そこで「浄水場はどんな仕事ですか。」と聞くと「みんなの家に安心・安全な水を届ける仕事です。言ってみれば水の工場のようなものですね。」

と優しく教えてくれたのを今でも覚えている。その説明をしている人に対してかっこいいと思った。僕たちの生活に欠かせない水を安心して使

うことを支えている仕事に誇りと責任を持っていたからだ。他にも下水処理場というものもある。下水処理場では家庭や工場などで使われた水をきれいにして海や川に流している。

このように僕たちがあたり前に水を使えるのは、たくさんのおかげである。それを知らずに無駄に使う人がいるのがとても残念でならない。毎日をきれいにしてくれている人がいるということをとくさんの人に知ってもらいたい。

水を無駄に使ったり、油をそのまま流したりする人が少しでも減ってほしいと願う。

今回、調べてわかったことだが僕たちは一日平均で一人あたり二〇〇リットル以上の水を使っているそうだ。仮に日本国民全員が一日一リットル節約するだけで一億二〇〇〇万リットル以上の水が節約でき、一年間で四三億リットル以上節約できると計算されている。こう考えるとやはり一人一人がもっと水に対する意識を高くもつ必要がある。そうすることで水の環境問題も解決へと向かっていくと僕は思う。

これから何十年、何百年先も水をあたり前に使える世の中であってほしい。もしも水がなくなったらふだんの生活が成り立たなくなる。そればかりか生命維持の危機にさらされる。そうならないために安全・安心な水をずっと保ち続けなければならない。浄水場や下水処理場、その他大勢の人達へ感謝の気持ちを忘れてはならない。何よりもふだんあたり前に得ている水に「ありがとう」と言いたい。

【人間と水の関係】

青森県 むつ市立関根中学校 三年 小笠原 磨祐

私達人間の身体のおよそ六〇パーセントは水分でできています。私達が飲料水などといった水分は、腸などの器官から吸収され、血液などの体液となつて、全身を循環しています。生命を維持するのにも、やはり水は欠かせません。私達は、一日に二・五リットルもの水分を摂っているとされています。まず、飲み水で一・二リットル、次いで食事で一リットル、さらに代謝水といわれる糖質、たんぱく質、脂質などからエネルギーになる時に発生する体内で作られる水もあり、その量は〇・三リットルなのだそうです。

それとは反対に体外に出る水もあります。排尿・便で一・五リットル、汗で〇・五リットル、呼吸で〇・五リットルといった具合です。運動をした時は、これよりも余計に多く水が入りしています。

そんな私達の身体は水分が不足するとさまざまな健康障害を引き起こします。水分を五パーセント失うと脱水症状や熱中症になります。一〇パーセント失えば、筋肉がけいれんし、循環不全におちいります。そして、二〇パーセントもの水分を失えば、人間は死に至るとも言われています。

今から、約三年前、小学六年生の頃、僕は軽い脱水症状を引き起こしたことがあります。原因は、朝から水分を摂っていない状態で校庭を走り、その後に水分を摂らなかつたためです。その時は、吐き気をもよおし苦しい思いをしました。幸い適切な処置がほどこされ、無事ですみました。それから水分をこまめに摂取するようになりました。朝、運動後、食前後、入浴前後は特に気をつけて水分を補給しています。

このように私達人間の身体と水分は密接な関係にあり、水はなくてはならないものです。

この前友達が、「水は人間にとって都合が良すぎる。」と、言っていました。僕はそれは逆で、人間を含む今いる生物は、水に都合がいいように進化し、生き残ってきたのだと思っています。

人間は、仮に食べ物を一週間摂らなくても、生きていられますが、水はそうはいきません。三日間水を摂らないと生きていられないそうです。ユースで時々遭難していた人が保護されたというものを見ますが、たいして生還できた人は、救助されるまでの間にどうにか水分を保てた人です。それくらい人間にとって水は大切なものなのです。

ところで、身体に関係する水として真っ先に思いつくのが汗です。運動した後、例えば昼休みサッカーをした後や、体育の授業後に多くの汗をかきます。実は運動していなくても、〇・五リットルの汗をかいているそうです。

感動する映画や、心がせつなくなつた時にでる涙もあります。感情が高ぶり、交感神経が優位になると、涙腺が刺激され、涙が流されます。花粉症やアレルギーで引き起こされる生理的な涙もあります。

ここまで身体に関係する水分について調べましたが、水分を摂取することも、排出することも大切で、どちらも適切にしないと生命の維持ができませんということがよくわかりました。

僕は小学六年生の出来事以来、こまめに水を飲むようになりました。中学三年生の今はあの頃よりもよく運動するので汗をかくようにもなつたと自覚しています。

こうしてみると、健康を維持するためにも水は欠かせないものであることがよくわかります。

これから暑い夏を迎えます。ますます僕は水のお世話になりそうです。

【わたしたちのあたりまえは】

青森県 むつ市立関根中学校 二年 中野 沙月

「えっ！水道水を飲んでの？」

一月一日。新年早々。私は愛知に住む親戚のおじさんにこう言われた。

私はとても驚いた。というのも、私は毎日ごくあたり前のように水道水を飲んでるからだ。でもどうやら親戚のおじさんにとっては、そのことが普通ではないのだ。

おじさんが住んでいる地域では、水道水を飲むとお腹をこわしてしまうこともあるという。私はその話を聞いて、

（水道水はどこでも安心して飲めるわけではないのか。よし、他の都道府県や他の国の水道水について調べてみよう。）
と思った。

まずはじめに、日本全国の水道水について調べてみた。そして、すぐさま驚いた。それは、日本の中で水道水を飲むことが薦められないとされる都道府県が八つもあったからだ。私のこれまでのイメージでは、日本全国どこでも水が豊かできれいだという認識だった。なので驚いたし、何よりも少し悲しくなった。

幸いにして青森県はその八都道府県の中に含まれていなかったが、同じ東北地方の宮城県がそこに入っていたことにとても驚いた。私の親戚のおじさんが言っていたことは真実だったんだなと、と改めて思った。

次に、海外の水道水の実情について調べてみた。世界一九五カ国中安全に水道水が飲める国はわずか九カ国しかないそうだ。先に述べたとおり、日本でも八都道府県の水道水が安全に飲めない。そのことについてすごく驚いたけれど、世界で考えるところではない。日本はやはり水資源に恵まれた、裕福な国なんだな、と思った。

他国の水事情についてもっと知りたいと考えた私は、最も水不足と考えられているケニア人と日本人の一日に利用する一人あたりの水の量を比較することにした。

まず日本人の水の使用量が、トイレ八十四リットル、お風呂七十二リットル、炊事六十八リットル、洗濯四十八リットル、その他二十七リットルの合計一人あたり約三百リットルにもなるそうだ。通常の家庭のユニットバスに水を満タンに注ぐと、約二〇〇リットルなので、私達が一日に利用している水の量はユニットバスより多いばかりでなく、その約一・五倍の数量と推測できる。

一方、ケニア人はどうか。彼らが一日に利用する水の量は一人当たり役十四リットルだそうだ。私はこの数値データを見た瞬間、わが目を疑った。

「たった十四リットル？うそだ。絶対もっとそれ以上使ってるにきまつてる。」

そう考えてしまったが、どうやらそれが現実らしいのだ。そこでさらにケニア人の生活について調べてみた。ケニアの人々は毎日水を遠くまでくみに行かなければ水を得ることができないと書いてあった。水を得るためにも労力を使うので、必然的に利用料が少なくなるのかもしれない。これも一つの原因ではないかと私は考えた。

もう一つケニア人の水の利用料が少ない原因として考えられることがある。それは現地の環境だ。ケニアのトイレはいわゆるポットン便所だ。なので水が必要ない。お風呂のない家庭が一般的だ。料理でもウガリという少量の水で作れるものを食べ、食器洗いの時に少し水を使うという生活様式だ。すなわち水を使う場面が日本と比べて圧倒的に少ないのだ。というより日本が水を使いすぎると言うべきかもしれない。

私は今回、水についてこの作文を書くことにより、私達日本人は無意識のうちに水を無駄遣いしているのではないかと思うようになった。水が身近にあるのはあたり前ではないと。みなさんの思っているあたり前は、本当にあたり前なのだろうか。

【水への理解】

青森県 むつ市立関根中学校 二年 山本 芽依

みなさんは普段から水を大切に使用しているだろうか。私はつい最近まで水をあまり大事に使っていなかった。

そんな時、ある出来事が起こった。それは去年の冬のこと。冬の寒さにより、家の水道管が凍結して水道水が出なくなったのだ。その結果、シャワーのお湯も満足に使えなくなり大変だった。この体験から私は水をもっと大切に使用しようと思えるようになった。

私には疑問に思ったことがひとつあった。そこで母に尋ねた。

「どうやったら凍結したのを直せるの？」

と。すると母は、

「タオルやぬるいお湯を使えば直すことができるよ。」

と教えてくれた。母はこういう時の対処法を理解していてすごいなと思った。

身近な人に聞いただけではわからないことも多いので、水について実際に調べてみることにした。色々なサイトを開いてみると、驚きのニュースが目に入った。それは、現在世界の約七億人が水不足の状況で生活しているということ。そして、水不足のため毎日四九〇〇人、年間一八〇万人もの子どもたちが亡くなっているという悲惨な現実。

なぜ水不足がこんなにも多いのだろうか。それには大きな理由がある。

一つ目は「水の使用量増加」。人口増加や産業発展が原因だと見られている。人口が増えるほど水の使用量は増え、不足は深刻になっていく。さらに、産業発展に伴う生活レベルが向上し水資源が汚染されていくのだ。

二つ目は「水を効率よく使えていないこと」。水の利用可能量は異常気象により、とても不安定になっている。実はこれを促進しているのが、地球温暖化の原因とする気候変動らしい。降水量だけでなく、雨の強度や頻度も変化させている。そのため、水不足が悩む地域が出てきやすくなるというのだ。

三つ目は「水源が守られていないこと」。都市化により水源が破壊されている。また、排水によりさらに汚染されていく。世界を見渡すとインフラが整っていない地域が圧倒的に多く、安全な水は不足していくばかりだという。

では、私たちに何かできることはないだろうか。こう問われてすぐに思いついた人がいる反面、容易に思いつかない人がおそくいるだろう。今までの私は水に興味がなかったため、後者にあてはまる。しかし、そんな私でもじっくり考えてみると答えが出てくる。「節水を心がける」、「生活排水の汚れを減らす」などたくさんの方の対処法が。

では、それを確実に達成するためにはどんなことが大切なのだろうか。私はもつと一人一人が水に対する意識を少しずつでも改めていけば、水不足は減るのではないかと考えている。個人レベルでは大きなことは簡単にできないのかもしれない。それでも、大勢の人が意識して改めることで必ず水不足の問題は解消すると信じていたい。前の私のような考えをしている人は少なからずいるだろう。そんな人にも水に対する意識を変える呼びかけをしたら少しでも変わるのではないか。

まず私自身も身近な人に伝えてみようと思う。そうすれば、きっと水不足を解決できる。水が使えなくなるといふ不測の出来事により私は関心をもつことができた。でも、使えなくなつてから水の大切さに気づくのは遅い。すべての人が安全できれいな水をいつでも活用できるように常日頃から節水に努めるべきである。私は強くそう思った。今現在の世界の水の事情をしっかりと理解することも必要だ。水に対しての考えを学校の社会の授業でも深めて、今よりももつと水に対する感謝の思いを高めていきたい。

【私たちに関わる水】

青森県 むつ市立関根中学校 一年 坪 笑鈴

最近、私は社会の授業で「SDGs」について勉強した。その中でも一つ気になることがある。それは、「安全な水とトイレを世界中に」という項目だ。近年、水をめぐり環境がいちじるしく悪化し、大きな問題になっている。

世界は広く、なかなか知ることができないので私は身の回りを見つめてみることにした。

私たちは、「運動会」や「むつ市の夏まつり」の時、「田名部おしまこ踊り」という曲を踊っている。その歌詞の中に、「田名部川の水を飲めば、八十婆様も若くなる」と

いうフレーズがある。この歌詞を聞くたびにいつも疑問に思うことがあった。「昔の人は、本当にこの川の水を飲んでいたのだろうか。」と。

現在の田名部川を見ると、ゴミが流れていたりして、明らかに汚れている。どうみてもこの川の水は飲めそうにない。

祖母に、昔のことを尋ねてみた。祖母はこう答えた。

「小さいころ、村ではね、飲み水は井戸からくんでいたんだよ。『大きなかめ』にそれを溜めて使用していたのよ。家の前には『用水路』が流れたなあ。その水で野菜を洗ったり、洗たくをしたりしていたのを今でも覚えてるよ。」と。

祖母の話信じるなら、今と違って、どうやら昔の川はきれいだったようだ。でも、衛生面ではどうだったのかなあと、疑い深い私は思った。

現在は、どこの家庭でも水道の蛇口をひねると、たいていきれいな水が出るし、店でも、ペットボトル入りの水が売られていたり、実に便利な世の中に変わってきている。その反面、川にゴミが捨てられたり、環境汚染が広まってきているように見える。これは水に対する裏切り行為だ。

では、私たちが、この先もずっと「安心」で「安全」な生活をするためには、何をすべきだろうか。それを考えてみた。

「川にゴミを捨てない」、「水の無駄遣いをしない。」こうしたあたり前の小さなことを確実につづけることで大切な水は守られる。私もできることから行動に移してやってみようと思う。

今日は身の回りの水について考えてみたが、これからは世界へも目を向けていきたい。世界における水事情を正しく理解することも絶対に欠かせないことだと思うからだ。それが本当の意味での「SDGs」につながると思っている。

【僕の思う水】

青森県 南部町立名川中学校 二年 赤石 聖那

水とは、僕たちの生活に大切な、ライフラインの一つである。顔を洗う、手を洗う、料理をする、お風呂に入るなど僕たちは当たり前前に水を使っている。中学一年の暑い夏のある日。僕は「水が飲みたい。」と水道の蛇口を開けた。ジョーッと水が出てくる。そして、こう思ったのである。水はずっと出てくるのではないか、と。水は無限なのだ。でも、今は思う。水には限りがあるのだろうか、と。

その答えは「ある」である。現在の海から毎年、約二十三億トンの水が失われていくと、約六億年で海の水はなくなる計算だという。六億年後なんて自分たちには関係ないと思っている人も多いのではないだろうか。

では、この世から水が無くなると、どうなるのだろうか。その答えは、「すべての生物が絶滅してしまう」である。人間の体は約五十パーセントから六十パーセントが水分でできているといわれている。人間の体から十パーセント以上水分が失われると、死にいたることもあるそうだ。水は生きていくためにとっても大切だ。

その点、日本は恵まれていると僕は思う。日本の年間降水量は世界平均の約二倍である。さらに、日本の水質は世界の国々に比べ、とても高い。僕たちは日頃から、安心安全の水をいつでも使うことができている。

ここで、忘れてはいけないことがある。それは、日本のように水を使うことができる国はとても少ないということである。

二〇一八年国土交通省の調査によると、世界で安全に水道水を利用できる国は、九ヶ国のみであることが分かった。世界には約百九十ヶ国以上の国がある。その約九十パーセント以上が水を安全に使うことができているのである。

では、なぜ水不足、水質汚染が起きるのだろうか。水不足の原因の多くは、人口増加や産業発展による「水の使用量増加」、地球温暖化が引き起こす気候変動が、「水利用を非効率にしていること」など、人間によるも

のなどだ。また、水質汚染の原因の多くも、産業排水や生活排水、地球温暖化などがあげられる。これも全て、人間によるものだ。

人間にとって、欠かせない、とても大切な水。それを使う人間たちが不足させ、汚染している。これを知ってほしい。

水を毎日、安定した量を使うことのできる世界にするためには、「未来を考える」ことのできる「優しい心」は必要となる。日頃からできることはたくさんあるのだ。例えば、生活のあらゆるところで無理のない節水を中心掛けることがとても簡単なことだろう。シャワーを使うときは、シャワーをこまめに開け閉めする、お風呂の残り湯は、お風呂の掃除や、洗濯・洗車、植物への散水に再利用するなど、たくさんできることがある。世界の水問題への対策の第一歩は、「世界の水問題を知ること」である。今一度、水について考えていただきたいと、僕は思う。